# 火野葦平「白い顔に黒い痣」論

## ――『聊齋志異』「瑞雲」の受容と改変――

増　田　周　子

# Hino Ashihei's Theory of "Black Birthmarks on the White Faces"

## – the Reception and Transformation of "Zuiun" 瑞雲 from the "*Ryōsai shi'i*" 聊齋志異.

MASUDA Chikako

Hino Ashihiei's "Black Birthmarks on the White Faces" is a short story from a series of elegantly humorous Chinese stories. He based his work on the Chinese short story "*Zuiun*" that is part of a large 18th-century compilation of stories known as the "*Ryōsai shi'i*". Ashihei incorporated and modified the original to meet his own unique interpretation of the modern novel. There is something remarkable in his discernment of humanity, and "Black Birthmarks on the White Faces" soundly critiques human opportunism. This research compares "Black Birthmarks on the White Faces" against the original "*Zuiun*" from the "*Ryōsai shi'i*", and pursues Ashihei's ubiquitous themes of humanity and what humanity should be, with the hope that it will clarify one aspect of East Asia's cultural heritage, its transmission, reception, transformation, and creation.

キーワード：火野葦平、中国、『聊齋志異』「瑞雲」、改変、オポチュニズム批判
人間心理、「創作ノート」

## はじめに

日本の近代作家達は、周辺の東アジア諸国に、日本とは違う憧れを抱き、神秘性を感じ、そして関心のある東アジアの地を訪れた。芥川龍之介の中国趣味は有名である[1]し、谷崎潤一郎のインド趣味、オリエンタリズムへの傾倒[2]もよく知られている。佐々木信綱も中国に憧れて、日本を旅立ち、生涯に一

1）芥川龍之介「上海遊記」（『大阪毎日新聞』大正一〇年八月一七日～九月一二日）、「江南遊記」（『大阪毎日新聞』大正一一年一月一日～二月一三日）など参照。

2）谷崎潤一郎「玄弉三蔵」（『中央公論』大正六年四月一日）「ハッサン・カンの妖術」（『中央公論』大正六年一一月一日）「秦淮の夜」（『中外』大正八年二月一日）などの異国綺談参照。

度の中国漫遊[3] を行ったのである。現地を訪れた作家は、多くの外国人と交流を持ち、その地で文化や書物に触れた。また、現地に行けなかった作家達は、日本に伝播、受容されてきた書物を愛読したのである。このようにして、東アジアの文化遺産ともいうべき古典文学などの書が読まれ、受容されていったのであった。英語、中国語、韓国語など、日本語とは違うその国の言語で読んだ人もいれば、翻訳で読んだ作家もいた。

作家達の目にどのようにして触れたかは、様々ではあるが、東アジアの文化遺産的書物に触れ、それを素材として加筆、改変し、独自の近代小説を創作していった作家が大勢いたのである。例えば、中島敦の作品の多くは、中国の書物が取り入れられていることは、広く知られている。今では、日本の高等学校の教科書に必ず掲載されている「山月記」[4] が、『唐人説薈』中の「人虎伝」を典拠としていることは、ほぼ常識である。芥川龍之介「酒虫」(『新思潮』大正五年六月一日)、太宰治「清貧譚」(『新潮』昭和一六年一月一日)などは、『聊齋志異』を原典として、受容と改変を行い、独自の文学世界を切り開いている。

さて、本稿では、これら、東アジア諸国の文化遺産に興味を持ち、自己の文学作品に取り入れていった作家の中から火野葦平に注目してみる。火野葦平の「白い顔に黒い痣」という短篇小説をとりあげ、中国古典文学『聊齋志異』「瑞雲」の受容と改変の過程を考察していきたい。東アジア文化交渉学で研究している、伝播、受容、変容、生成の問題の一端が解明できればと考えている。

なお、「白い顔に黒い痣」に関しては、暮安翠が「あらすじ」の紹介をし、「艶笑譚をふくめた読物分野も、もっと探求されてよいではなかろうか」と記し、[5] 火野葦平の艶笑物を研究する必要性を提唱している。しかし論文としてはこれまで全く取り上げられていない。本稿で紹介する「白い顔に黒い痣」の「創作ノート」も初公開のものである。「創作ノート」の掲載の許可を快諾して下さった、火野葦平御三男の玉井史太郎様、いろいろとお世話をして下さった火野葦平資料館の皆様方に厚く御礼申し上げます。

## 一　火野葦平「白い顔に黒い痣」の成立と収録過程

火野葦平「白い顔に黒い痣」は、昭和二五年二月一日に『読物時事』(第六巻二号)に寺尾善積の装画を入れて発表された。その後、次の五冊に収録されている。

① 『中国艶笑風流譚』(昭和二六年一月一〇日、東京文庫)
② 『東洋艶笑滑稽聚』(昭和二七年五月三〇日、東京文庫)
③ 『美女と妖怪――私版　聊齋志異』(昭和三〇年七月一日、学風書院)
④ 『中国艶笑風流譚』(昭和三一年二月一〇日、学風書院)
⑤ 『中国艶笑物語――私版　聊齋志異』(昭和三一年三月五日、河出書房)

3) 雛双双「佐々木信綱の中国漫遊」(関西大学『国文学』平成二一年三月一〇日)七七～九五頁
4) 中島敦「山月記」(『文学界』昭和一七年三月一日)
5) 暮安翠「葦平の艶笑譚と怪奇推理小説――さらなるテーマ、エロス・幻想について――」(『あしへい』二〇一年一二月三日)一三四頁

火野葦平は、～譚シリーズとの作品群の一つとして「白い顔に黒い痣」という短編小説を発表したのである。これら五冊の「白い顔に黒い痣」収録本を検討してみると、多少、句読点などが削除されたり加わったりしているが、初出の『読物時事』版の「白い顔に黒い痣」と五冊の収録本は、ほとんど変化がなく、句読点の有無や、旧仮名遣いが新仮名遣いになったりしている程度である。火野は収録にあたって大幅な書き換えなどはおこなっていない。なお、ほとんど訂正がないため、本稿では収録本の最後『中国艶笑物語――私版　聊齋志異』をテキストとして考察していく。

## 二　火野葦平「白い顔に黒い痣」の典拠となる『聊齋志異』「瑞雲」

「白い顔に黒い痣」の素材は、『聊齋志異』「瑞雲」からとられている。『聊齋志異』は、蒲松齢（一六四〇年-一七一五年？没年不詳）の表したもので、内容は、神仙や幽霊や狐狸の怪異譚で、世間に口伝されていたものを筆記し、まとめたものである。『聊齋志異』を日本語に翻訳した一人である柴田天馬は、「序文」で『聊齋志異』について次の如くに記している。

> 若し「支那の稗史小説の類で、最も多く読まるゝは何か」と問ふ人があつたなら、予は「聊齋誌異」と答ふるに躊躇せぬ。実にこの書ほど面白く、この書ほど文章が立派で、この書ほど読みあかぬものは無い。呂湛恩先生が「初は聊齋誌異あるを知らず、其後之を聞て喜べるも、又読むを得ざるを憾とす、長ずるに及んで之を読むに神興相迎へて之を引くあるが若く、幾んど啜を忘れ枕を廃するに至れり、噫亦癖せり矣」といひ三年もかゝつて「聊齋志異註」を著したのも当然のことである。文学を解するほどの支那人が「聊齋、聊齋」というて此書を愛読するも当然のことである。[6]

柴田天馬の言うように、『聊齋志異』は実に面白く、中国人の読者もこぞって、また、必死になって注釈しながら読んだようである。

さて、火野葦平はどのように『聊齋志異』に興味を抱いていったのであろうか。火野葦平は、『美女と妖怪――私版　聊齋志異』の「あとがき」で、「早稲田文科時代、私は杜小陵と李太白との詩に惹かれて、自分も漢詩をつくつたりしたことあつた。私のやうな浅学な者はたちまちそのむつかしさに辟易してやめてしまつたが、それがきつかけとなつて、両詩人の唐本詩集とならべて、商務印書館版の『古今奇観』や『聊齋志異』を机上におくやうになつた。そして、それを漢和辞典をひきながら熱心に読み、興趣のつきざるものをおぼえた」[7] と記している。

早稲田文科時代の大正期に、漢詩を愛読し、自らも漢詩を作ったり、中国文学に親しんでいたのであった。そして漢文で辞書を引きながら、『聊齋志異』を読み、非常に興味を持ったのである。

だが、葦平は、『聊齋志異』の「むつかしさに面倒くさくなつて投げだしてしまつた。それから、後年、柴田天馬氏の名訳が出るにいたつて、さらに往年の感動を新にしたのである。柴田氏の訳文は原語

6）柴田天馬「序文」（『和訳　聊齋志異』大正一五年三月一〇年、第一書房）
7）『美女と妖怪――私版　聊齋志異』（昭和三〇年七月一日、学風書院）二七六頁

をたくみに生かした実に気のきいたもので、その親切な註解とともに、昔、中途半端にしか読んでゐなかつた私をすこぶる満足させてくれた」[8] という。

さて、葦平が、感動した柴田天馬訳の『聊齋志異』は、大正一五年三月一〇日に、第一書房より刊行されている。また、柴田天馬訳は昭和八年にも第一書房から発刊されている。火野が何を手元に置いていたのかは不明であるが、柴田天馬訳の大正一五年版『聊齋志異』の中に「白い顔に黒い痣」の典拠となる『聊齋志異』「瑞雲」も訳されている。これらの柴田天馬訳『聊齋志異』を火野は愛読していたのであろう。また、火野は、「終戦後は、北京からかへつてきた村上知行氏の訳が出版された。これはまた原文を思ひきつてくだいてしまつた平易な文章で、柴田氏とは、別個の味はひがあつた」[9] と述べている。昭和二五年に「白い顔に黒い痣」を発表するまでに、村上知行訳『聊齋志異』は、『聊齋志異香艶抄』（昭和二二年一二月一五日、光文社）、村上知行訳『もだんらいぶらりい　聊齋志異上巻』（昭和二四年五月一五日、東西出版社）などが発刊されている。いずれにも、「瑞雲」は訳されていない。そこで、本稿では、柴田天馬訳の大正一五年版『聊齋志異』の「瑞雲」をテキストとして考察に用いることとする。考察のために必要なので、「瑞雲」のストーリーを記してみる。

杭州の名妓瑞雲は、十四歳で絶世の美女であった。母親の蔡が、客をとらせようとすると、値段は母の決めたとおりにするが、一生の問題なので相手の男は自分に選ばせてくれと言う。何人もの男が瑞雲を訪れた。中くらいの財力の、それでいて才子で著名な賀という男が瑞雲に会いに来た。賀は、僅かなお金しか持っていかなかったが、自分を大事にし、楽しく語ってくれた瑞雲を慕い、詩を創作して贈ったが、時間切れで帰らざるを得なかった。数日過ぎて、瑞雲に会いたくて、また賀が訪れた。瑞雲から一晩泊まるように勧められるが、お金がないので無理だと断った。お金がないため、賀は瑞雲に会うのをあきらめ、それから訪れなくなった。瑞雲は、旦那を選ぶのに数ヶ月も費やすが、一向に決めない。母親は、かなり怒り、男を押し付けようと思うが、我慢していた。ある日、秀才の男が瑞雲に会いに来る。暫く話していたが、瑞雲の額に黒い痣をつけた。何日もたつとその黒い痣は広がり、一年もすると顔中が真っ黒の痣だらけになった。人々は可笑しがり、客も訪れなくなった。母親は美貌を失った瑞雲を婢と同じ台所で働かせ、瑞雲は落胆し憔悴していった。そのことを聞いた賀は哀れに思い、身請けを願い出たら母親も安価で承知した。瑞雲は、醜くなった自分は妾の身でいいと言うが、賀は瑞雲を正妻として大切にした。それを聞き知った人々は誹り笑った。それでも、賀は瑞雲を、ますます愛した。一年ほどたち、賀は蘇州の宿で和という知識人に偶然出会い、話をした。すると、和は、杭州にいた有名な芸妓の瑞雲がどうしているかを尋ねた。賀は自分と結婚したことを話した。和は、昔瑞雲を見たとき、世にも美しい女性であるが運勢が悪そうなので、術を使って才能のある人物に出会うまで、光をくらまそうとしたと言う。賀は、瑞雲の黒い痣を取り除いてくれるように和に頼んだ。和は盥に水を入れて、そこに指で字を書いた。その水で瑞雲が顔を洗うと、もとの美しい顔に戻ったのである。和はもういなくなっていた。和はおそらく仙人だったのであろう。

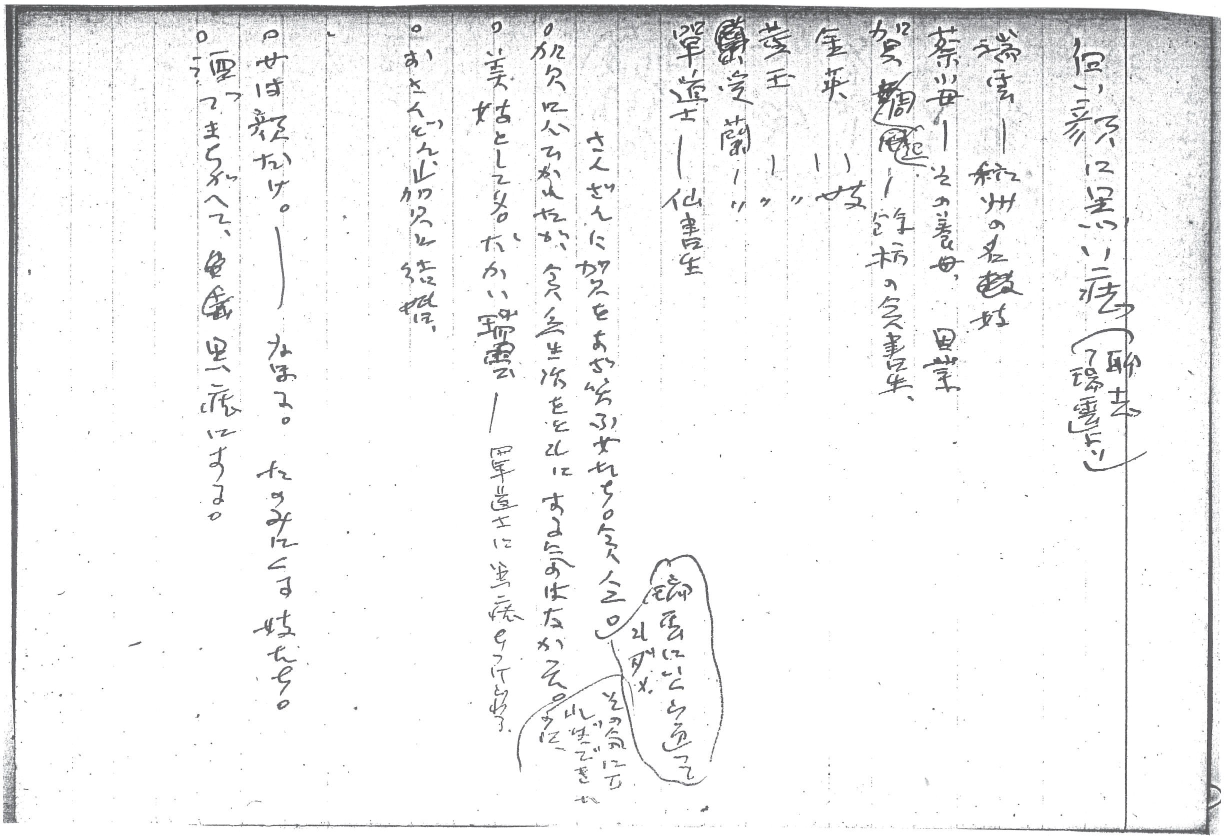
以上が、『聊齋志異』の「瑞雲」の話である。火野葦平の「白い顔に黒い痣」もストーリーの骨子は、

8）『美女と妖怪――私版　聊齋志異』同　二七六頁
9）『美女と妖怪――私版　聊齋志異』同　二七八頁

ほぼ同じである。しかし、火野葦平「白い顔に黒い痣」は、「瑞雲」に、かなり加筆している点がある。「白い顔に黒い痣」は、一万六千九百字程度の作品であり、「瑞雲」は三千六百字程度の作品である。「白い顔に黒い痣」は「瑞雲」の四倍以上の長さの作品となっている。次章以降、火野が加筆したり、「瑞雲」とは話を変えた部分を中心に説明していきたい。

## 三　火野葦平「白い顔に黒い痣」の「創作ノート」

火野葦平は、「白い顔に黒い痣」を執筆するにあたり、「創作ノート」を残している。「白い顔に黒い痣」の創作の過程がわかる重要なメモ書きであるので、ここに現物を示し、翻刻して全文をあげてみる。



白い顔に黒い痣（聊志「瑞雲」より）

瑞雲――杭州の名妓

蔡小母――その養母、因業

賀周起――余杭の貧書生。

金英――妓

黄玉――妓

愛蘭――妓
単道士――仙書生

さんざんに賀をあざ笑ふ女たち。貧乏。　瑞雲にいくら通つてもダメ。
○　賀に心ひかれたが、貧乏生活をともにする気はなかつた。その気になればできたらうに。
○　美妓として名だかい瑞雲――単道士に黒痣をつけられる。
○　おさんどん。→賀と結婚。

○　女は顔だけ。――なほる。たのみにくる妓たち。
○　酒でまちがへて、黒痣にする。

以上が、「白い顔に黒い痣」の「創作ノート」である。この「創作ノート」を見てみると『聊齋志異』の「瑞雲」とは、話を変えようと企図している様子がよく分る。まず、登場人物を増やしている。金英、黄玉、愛蘭という三人の『聊齋志異』の「瑞雲」には出てこない妓を、火野葦平は造り出そうとしていた。ただ、「白い顔に黒い痣」には、黄玉しか登場しない。また、「創作ノート」には、「単道士――仙書生」とある。「創作ノート」にあるように、「白い顔に黒い痣」では、仙人の書生に単という名をつけている。『聊齋志異』の「瑞雲」では名はない。それだけでなく、他にも、重要なことが「創作ノート」には隠されているので、後述したい。

## 四　火野葦平「白い顔に黒い痣」と『聊齋志異』「瑞雲」の比較

さて、火野葦平「白い顔に黒い痣」は、『聊齋志異』「瑞雲」をどのように、加筆し、改変しているのであろうか。先にも記したようにストーリー展開の骨格はほとんど同じである。女性の登場人物を増やしているところと、最後の展開が、全く「瑞雲」と異なる。また、火野葦平「白い顔に黒い痣」は、登場人物の心理表現が詳細に書かれている点が「瑞雲」と違うところである。以下、登場人物に焦点をあてながら、順を追って示していく。

### a　瑞雲の母蔡の人物表現描写の加筆

『聊齋志異』「瑞雲」では、芸者屋の養母であろうとなんとなく推察されるが、瑞雲の母親である蔡は、実の母なのか養母なのかはっきりとはわからないように記されている。しかし、「白い顔に黒い痣」では、「創作ノート」にも、「蔡小母――その養母、因業」と記しているように、最初から芸妓置屋の商売上の母親と規定している。その上で、蔡の人物描写をかなり書き加えた。蔡は、「花柳界でも有名な強欲で、おまけに吝嗇」[10] の聞こえが高いと設定し、母といえども血がつながらないので、名妓の瑞雲が「はやく、たれかから女にされる日がきて、十五金という大金のふところにはいるのが、待ち遠いのであ

10)『中国艶笑物語――私版　聊齋志異』同　八〇頁

る」[11] という。『聊齋志異』「瑞雲」には「客を応せようとする」[12] としかないところを、「白い顔に黒い痣」では、吝嗇、強欲などとより具体的な性格描写を施しているのである。そして

「望み手は、いっぱいいるんだから、三度か五度くらいは水あげできるよ。お前もいいことするんだし、こちらも儲かるし、こんな滅法な福運はないじゃないか」[13]

という蔡の言葉を記し、「因業な蔡小母の計算はこまかい」[14] と計算高さをよりリアルに描写する。また、『聊齋志異』「瑞雲」では、瑞雲が「価は母さんの由定にしますから、お客は女に択ばして聴さいネ」[15] と言うと「諾だヨ」と記しているだけであるが、「白い顔に黒い痣」では、瑞雲は、「あたし、金など欲しくはありませんから、身代金はすっかりお母さんにあげます」[16] と言い、蔡は「いいよ、勝手にお選び、しかし、なるべく早目に、せいぜい金ばなれのいい旦那をな」[17] とある。このように蔡の計算高さを強調する。そして、「白い顔に黒い痣」には、『聊齋志異』「瑞雲」にはない語り手が登場する。その語り手が「遊里はすべて金次第である。金がなくては、会うこともできない」[18] と述べる。以上、蔡の性格描写の加筆からは、金で動く人間の強欲さ、金に支配される世界を浮き彫りにしていることがわかる。

### b 「白い顔に黒い痣」ラストシーンの『聊齋志異』「瑞雲」との相違

「白い顔に黒い痣」のラストシーンは、全く『聊齋志異』「瑞雲」とは異なる。「白い顔に黒い痣」では、賀は、広徳で学問の会議があるので旅をし、おでん屋[19] に立ち寄った。その場所で、大酒飲みの客に会う。賀は、「行儀のよい酒のみ」と設定しているが、この大酒家は「徳利をもう十本もならべている」。この大酒家が、瑞雲に黒い痣をつけた男であった。作品中では単道士という呼称で登場する。単道士は、酒飲みと設定されている点も『聊齋志異』とは違う。『聊齋志異』ではただの仙人である。『聊齋志異』「瑞雲」と同様に、盥に水を汲み、指で文字を書く。その水で瑞雲が顔を洗うと、もとの絶世の美女に戻った。そこまでは、『聊齋志異』と同じである。その後、美女に戻った瑞雲を羨ましく思った妓が集まり、「莫大なみやげ物をととのえてきて、賀周起夫婦に百万遍のお世辞をたらたらと述べ」[20]、瑞雲に自分たちも美女にしてくれるように、単道士に頼んでくれとお願いする。既に酒を飲んでいる単道士は

11）『中国艶笑物語――私版　聊齋志異』同　八〇頁
12）柴田天馬『和訳　聊齋志異』同　一四八頁
13）『中国艶笑物語――私版　聊齋志異』同　八〇頁
14）『中国艶笑物語――私版　聊齋志異』同　八〇頁
15）柴田天馬『和訳　聊齋志異』同　一四八頁
16）『中国艶笑物語――私版　聊齋志異』同　八一頁
17）『中国艶笑物語――私版　聊齋志異』同　八一頁
18）『中国艶笑物語――私版　聊齋志異』同　七九頁
19）火野葦平は「おでん屋」には特に拘りがあり、非常におでんが好きであった。おでん屋川太郎をしようと考えたこともあった。そこで、『聊齋志異』「瑞雲」では、賀は単と宿で会ったのに「白い顔に黒い痣」ではわざわざおでん屋で会ったことにしたのであろう。酒に合うようにしたのだと考えられる。
20）『中国艶笑物語――私版　聊齋志異』同　九八頁

気軽に請合った。妓達は単道士のために、五石樽一杯の酒を用意する。単道士は「いちいち飲むのは面倒だ。この中に入った方が手間が省けてよい」[21]と巨大な酒壺に飛び込んでしまう。狂喜した妓達は、盥の水で顔を洗った。するとみるみるうちに、顔が黒痣で覆われてしまったのである。「たちまち阿鼻叫喚の巷」[22]となり、醜くなった妓達は、泣き、喚き、怒鳴り散らし、暴れた。手に、槍や、鉄砲、包丁などの武器を持ち、酒壺を取り囲んだ。

　姐御芸者の黄玉は、まっ黒の顔をびりびりふるわせ、大身の槍をひきしごいて、酒壺のなかへ数度つき刺した。ところが、槍が酒人を貫いて、底へかちりとあたるのに、単はなにごともなかったように、笑って、相かわらず酒をのむ。幾度やっても同じだ。業を煮やした黄玉は、「それ、壺をかえせ」と叫んだ。

　武装した黒女連は、たちまち、そこへ酒壺を横たおしにした。憎い嘘つきがころがり出てきたならば、ずたずたにしてやろうと、武器をとって、片唾をのんだ。ところが、ながれ出てきたのは酒ばかりで、単道士の姿は、もう、どこにも見えなかった。[23]

以上のラストシーンで、「白い顔に黒い痣」は終わってしまう。つまり、「創作ノート」にあるように、「酒でまちがへて、黒痣にする」というように火野は話を創作し、酒の飲みすぎが、悪夢を引き起こすことにしているのである。

### c　戦後オポチュニストの諷刺

『聊齋志異』「瑞雲」と、「白い顔に黒い痣」との相違で、最も大きい問題は、語りの問題である。説明的文章の中に、真を穿った興味深い表現が見られる。特に「白い顔に黒い痣」では、戦後オポチュニストの問題をとりあげている。例えば蔡小母も、瑞雲が黒痣だらけの顔になると、次の如くに排他する。

もう母たる蔡小母さえも、彼女を厄介者視する。客のなくなった芸妓というものは、意味がない。柳園のたれかれは、まっ黒な瑞雲の顔を見てさんざんに嘲笑する。馬子にも衣装という日本の言葉があるが、まっ黒の顔にいくら美々しい衣装を着せてみてもはじまらぬ。蔡小母は、女の第二の命ともいうべき着物までも取りあげる。そして、瑞雲を台所に追いやり、おさんどんにしてしまった。[24]

また、瑞雲が美女に戻ると、

---

21）『中国艶笑物語——私版　聊齋志異』同　九九頁
22）『中国艶笑物語——私版　聊齋志異』同　九九頁
23）『中国艶笑物語——私版　聊齋志異』同　一〇〇頁
24）『中国艶笑物語——私版　聊齋志異』同　九一頁

噂は千里でもたちまち走る。まして、同じ町内で、このことが知れぬ筈はない。即日、瑞雲の復活は杭州中に鳴りひびいて、祝いの客が殺到した。またもやオポチュニズムが横行する。昨日まで笑ったひとが、苞をさげて、拝しにくるのである。蔡小母までもとんできて、これからまた親子のまじわりを復帰しようといいだした。[25]

そして、「かつて賀周起を嘲弄し、罵倒した連中で」、「瑞雲がきたなくなると、鼻もひっかけなくなっていたばかりか、露骨に面とむかって、化けものだの、黒面坊だのとなぶっていた妓たちは」[26]、莫大なみやげ物をととのえてきて、賀周起夫婦に百万遍のお世辞をたらたらと述べるのである。

火野葦平が、この「白い顔に黒い痣」を発表したのは、昭和二五年である。ちょうど、アジア・太平洋戦争で敗戦を迎え五年たった時である。戦争中は、天皇は現人神で、日本のために、天皇のために戦わなければならないと信じていた人間が一転して敗戦すると、天皇反対側にまわる。そのような日和見主義的人間つまりオポチュニストが戦後は相当いた。火野葦平は、「白い顔に黒い痣」という作品でもオポチュニズムの問題を大きくとりあげ批判しているのである。

火野葦平は、「お礼」で次の如くに記している。

日華事変から太平洋戦争、そしてその敗北と戦後の混乱、かういうすさまじい潮流の中にもみこまれ、いくたびか泥濘の底に敗戦を通じて、信用できる人間と信用できない人間、自分を解つてくれる知己とどうしても解つてくれない他人の区別もはつきりわかり、かへつて逆境の中にも心の落ちつきはできました。[27]

火野葦平は、敗戦後の「白い顔に黒い痣」執筆の昭和二五年頃、人間の信用の問題を深く突詰めていたようである。瑞雲が醜くなったときは、蔑んでいたが、美女になると「賀周起夫婦に百万遍のお世辞をたらたらと述べ」る。自分の都合のよいように、くるくると替わる損得勘定の強い人間を、この「白い顔に黒い痣」という作品の中で、決して幸せな結末にはしなかった。そんな妓達は、黒い痣だらけの顔のまま終わってしまうのである。

また、瑞雲にも、火野葦平は、『聊齋志異』にはない性質を付け加える。賀と初めて会ったときには、瑞雲は美人、美人ともてはやされるので、高慢ちきで、「賀を憎からず思いはしたが、献身的に、犠牲の精神を発揮してまでという考えはない」[28] のであった。

ほんとうに惚れているのなら処女をささげればよいのだが、やはり、あとのことを考えると、そこまでの決心がつかない。やはり、女というものはえらそうなことをいっていても、苦労と不幸とは

---

25）『中国艶笑物語――私版　聊齋志異』同　九八頁
26）『中国艶笑物語――私版　聊齋志異』同　九八頁
27）火野葦平「お礼」（劉寒吉・小田雅彦編『花柵集　葦平本百冊上梓記念』昭和五五年、河伯洞）一〇九頁
28）『中国艶笑物語――私版　聊齋志異』同　八八頁

きらいなのである。賀とできあがってから生じるさまざまのごたごたを考えると、このちょっと男ぶりのいい書生との交際が、しだいに気づまりにさえなってきた。[29]

語り手は、このように瑞雲の心理を記す。火野の登場させる語り手は、女性批判をすることが多く、他にも「おだてられてのぼせるのは男女双方に共通だが、美人だともてはやされると、女の方は特別に驕慢になる」[30] などともある。女性が読むと鼻につかないこともないが、火野は男なので仕方ないだろう。ただ、「白い顔に黒い痣」では天秤にかけたり高慢ちきだったり、打算的だった瑞雲は、単道士に黒痣をつけられることになるのだ。『聊齋志異』「瑞雲」では、あくまで瑞雲が、「流落不偶いのを甚く惜しいと思つた」ため、仙人が彼女に相応しい才能の優れた人物が現れるまで、黒い痣をつけて醜くし、つまらない男にひっかからないようにしたという話で、高慢ちきなために罰を与えられるというようにはなっていない。

先の「創作ノート」でも、「賀に心ひかれたが、貧乏生活をともにする気はなかつた。その気になれば出来たらうに」と記している。火野葦平は、「白い顔に黒い痣」で、女の驕慢というものを創作当初から浮き彫りにしようと企図していた。

「白い顔に黒い痣」では、奢り高ぶった高慢ちきな人間の鼻をへし折り、そんなことでは人生はうまくいかないことを示している。人生に対する鋭い視座が感じられる。

### d　心の優しい賀と改心した瑞雲の幸福

打算的で、「おごりたかぶった」[31] 瑞雲は、黒痣をつけられ、落ち込み、すっかり気落ちした。一方賀は、どんなに醜くなっても瑞雲を愛し、求婚した。

「瑞雲さん、私と結婚してください」
「滅相もないことを。こんな化けもののようになったあたしが、なんで、あなたの奥さんなどに……」
「いや、私はあなたの顔と結婚するのではありません。私はあなたの心の美しさを信じています。人間は、知己が大切です。あなたは、全盛時代、たれもが私のような貧書生を軽蔑していたとき、対等に、私を私としてみとめてくれました。そのうれしかった気持を、どうして忘れましょう（後略）」[32]

このように言われ、瑞雲は涙を流し、妻など滅相もない、女中の身分でいいと答えるのだが、賀は頑として結婚を望み、とうとう瑞雲を落籍するのであった。このやりとりは、ほぼ『聊齋志異』「瑞雲」と

29）『中国艶笑物語――私版　聊齋志異』同　八八頁
30）『中国艶笑物語――私版　聊齋志異』同　八九頁
31）『中国艶笑物語――私版　聊齋志異』同　八九頁
32）『中国艶笑物語――私版　聊齋志異』同　九二～九三頁

同様である。しかし、火野は、会話文を多く増やし、よりリアリスティックに描くのである。学があり、人格者である賀と、驕慢な精神を捨て、改心した瑞雲は、絶世の美女に戻り、夫婦仲睦まじく過ごした。二人の様子は、日和見主義的オポチュニストの、蔡小母や妓達と対称的である。この善人二人の幸せを描くことによって、オポチュニスト達の欲深さや、悪癖が一層際立っていく。

## 終わりに

以上、火野葦平「白い顔に黒い痣」を考察してきた。「創作ノート」に「女は顔だけ」とある。顔が美人になりたいために、欲をむき出しにする妓達、顔が美人であることを商売にし、強欲になる蔡小母、美女に翻弄され、美女ばかりを追い求める「瓢客、通人、粋人、業平、助平」[33] 男達。また、「手のとどかぬ花を折ってみたいという」「理屈とは無関係の人間の欲求」[34] など、様々な、現代でも通じる普遍の人間の欲を、本作品はちりばめている。火野葦平は、「白い顔に黒い痣」で、単道士に次のように言わせる。

> 天下の知己は、真情のむすびあいによって、いつ、いかなる場所ででも、その最後の結合をつくりだします。深いものは、亡びません。しかし、軽薄なオポチュニズムというものは、いつでも流行に乗っていて、現象にばかり執着します。それは、あたかも日本におけるアプレ・ゲールや共産党に似ています。[35]

火野葦平は、人間の欲は尽きないが、瑞雲と賀のように「真情のむすびあい」が深ければ、幸福になることを示唆しているのである。火野葦平は、流行ばかりを追い求める戦後の昭和二〇年代の軽薄な時代風潮に懐疑的であった。それは、戦争を自ら体験し、その反省から「自分の眼で、しかと見てたしかめることがどんなに大切か」[36] を知った火野ならではの警告だったのである。火野葦平は、戦後、多くの作品やエッセイで「人間は滑稽動物である」[37] と書き続ける。

> 流行、風潮、オポチュニズム、仮面をかぶつたエゴイズムだけが人間と世界をうごかす最大の動力であるとすれば、昨日も信じられず、今日も信じられず、まして明日などをどうして信じられよう。滑稽動物である人間が右往左往している目まぐるしさによつてのみ、人間がむき出しになっている。[38]

---

33）『中国艶笑物語――私版　聊齋志異』同　八二頁
34）『中国艶笑物語――私版　聊齋志異』同　八二頁
35）『中国艶笑物語――私版　聊齋志異』同　九六頁
36）火野葦平「解説」（『火野葦平選集』昭和三三年四月一五日、創元社）四四六頁
37）火野葦平『赤い国の旅人』（一九五五年一二月二五日、朝日新聞社）などにも出てくる。
38）火野葦平「滑稽憲法」（『警友あいち』昭和二九年六月一日）一五頁

火野葦平は、人間は滑稽動物であると述べ、その滑稽さの中にこそ人間の真の姿があると考えている。滑稽動物である人間は、駄目だとわかっていても、酒に溺れ、男は美女に溺惑し、女は美しくありたいと願う余り周囲が見えなくなってしまう。滑稽動物である以上、完璧な生き方をすることはできないが、やはり、真心を忘れず、流行にばかり振り回されない生き方が必要だと、読者に訴えるのである。火野葦平は、「あとがき」で、次の如くに記している。

> 「聊齋志異」の溺愛者である日本の作家が、蒲松齢先生にことわりもなく、こういう変改をおこなったことを、多分、原作者先生は許してくれるであろうと、勝手に、私はきめている。そして、中国的な色っぽい妖異譚が、日本でこんな形の短編小説になって再現したことを、風流人の蒲先生は微笑をもって迎えてくれるにちがいないと、これも勝手に、私はきめている。[39]

火野葦平は、中国の古典文学『聊齋志異』を素材として、「中国的な色っぽい妖異譚」を見事に改変させ、普遍の人間ドラマを創作したのである。

39)『中国艶笑物語——私版　聊齋志異』同　二〇七頁